

第3章 「もの」から見た阿仁マタギ

主任調査研究員 名久井 芳枝

序

動物との真剣勝負を繰り広げたマタギの文化は、磁石のように現代人を引きつけるものがあるらしい。どことなく疲れてきた現代文明の中で、かつて大地に真っ向から挑んできたマタギの営みには虚構の入り込む隙間がない。いやでも虚構を住处としなければならない現代人が、そんな世界に惹かれるのは当たり前のことなのかもしれない。私にとってマタギの文化はこれまで未知の世界であり、幻のような存在であった。しかし「山と生きる人々」を長い間見つめ続けた視線の先には、日本の山の民を考える上で避けて通れない文化として、当然の事のようにマタギの文化が存在していたことも事実である。

しかし「阿仁マタギ」の調査を依頼された折は一瞬怯むものを感じた。これまでも多くの学者や研究者によって調査がなされているためであったが、案外マタギの営みを支えてきた「もの」に関する調査は手薄だという事を知らされ、「もの」について確かな聞き取り調査ができる最後の機会かもしれないと考え、調査に加わる事を決断した。引き受けた折は、マタギを支えた生活を丸ごととらえ、そこに自ずと浮かび上がってくる文化をとらえたいと思った。何故なら文化の根幹は日常生活に始まっており、文化を語るためには日常の営みをとらえておくことが不可欠と考えているためである。しかし3年という限られた期間の中では生活全般を「もの」によってとらえるのは不可能であり、方向転換を余儀なくされた。

風説と実態の相違

今回調査を引き受けた折、「マタギとはマダ(シナの木)の皮を剥ぐ人を言うのではないか」と言った風説があったため、それがどういう事を根拠にしているのか確認したいと考えていた。岩手県に存在するマダ素材の資料を多数調査し実測図を描いてきた私は、マタギの郷のマダ製品と岩手県のそれらを比較する機会にもなると考え、密かな期待を抱いた。しかし初めてマタギ資料館を見学した時から、マタギに関する資料の中にマダの存在が殆ど感じられない事実に違和感があった。今回の調査には調査員として根子地区の佐藤富久栄さん、比立内地区の松橋時幸さん、打当地区の鈴木米孝さんが参加しておられた。彼らはマタギであると共に代々「しかり」をされた家の方々であり、マタギ関係の情報の保有者としてこれ以上はないと思われる方々であった。そこで率直に先の風説について意見をお聞きしたが、お三方共に首を傾げられた。風説になんらかの根拠があれば、厳しい掟がある世界の営みの中では、必ずその痕跡がどこかに残っていると考えられる。確かにマダを素材とするものは[けら(蓑)]や[荷縄]として存在しており、[たいまつ]や農作業の時に使う「蚊よけ」の[火縄]にも使われた事が分かっているが、「またぎ(狩猟)」用具として必要不可欠なものとは考えにくい状況で、風説を支持するには根拠が薄い結果となった。調査員の佐藤富久栄さんは「マタギは山で荒仕事をするため、旧の正月から小正月の間の一週間、山神様に籠もって安全祈願をした」また「昔は6月16日に森吉山詣りをした。その折モロビ(アオモリトドマツ)の枝を伐ってきてそれを山神様に供えた。森吉山のモロビは燻すと非常にいい匂いがするので、またぎに出掛ける時には、そのモロビの葉を燻した煙で体を清めてから出掛けた。モロビの葉は燻すと、悪よけ、魔よけになると言われていた」と話して下さった。また松橋時幸さんに[またぎべら]の話がうかがった折、「[大ながえ]はナラ材で作ることがあるが、重くて体格の良いものでないと扱いがなかなか大変だ。しかし重い分威力もあり壊れにくい。[小ながえ]はイタヤ材で作る事が多いが、ナラ材より軽くて扱いやすい。しかし、雪の下に木が横たわっている事に気付かずに叩きおろしたような場合(だいごし)柄が折れてしまうことがある。ありとあらゆることを想定しながら道具を使っていけないと、えらい目に遭う」と話して下さった。また鈴木米孝さんの母千鶴子さんは、

夫で「しかり」であった故松治さんの事を語って下さった時「またぎに行く時の弁当に、味噌漬けを持たせることができなかった」と話しておられた。それは味噌漬けが「みそをつける（失敗する、しくじる）」に通ずると言う事で、松治さんがとても嫌ったからである。そうした話からは、山に入れば常に死が隣合わせである事へのぴりぴりとした緊張感が透けて見える。多少のやすらぎを与えてくれるものがあるとすれば、超自然の何かに心を委ねることであり、縁起をかついで心を鼓舞する事である。神経を研ぎ澄まして挑まなければならない営みの中では、先輩達の智恵が詰まった伝統を守ることこそが命を守る手段であったに違いない。そうした世界の中で、仮にマタギが「マダの皮を剥ぐ人」という意味を内在させている言葉だとすれば、彼らはその語源となったマダを何らかの形で残し続けたに違いない。しかし現実には、「またぎ（狩猟）」用具の中にマダの影は薄く、「マダの皮を剥ぐ人」が語源の由来とはなり得ないとの結論に達した。期待は見事に裏切られ、風説と実態との大きな相違に驚きを感じた次第である。学者や研究者の発した「何々かもしれない」と言う言葉が、やがて「何々らしい」あるいは「何々のようだ」になり、次第に「何々だ」と断定されていく過程が想像された。風説というものの危うさと思うと共に、現地における聞き取り調査の重要性が思われた。

慎重を要する聞き取り調査

聞き取り調査では、調査させて頂く「もの」については常に全く無知の状態でお話をうかがう事が良い結果につながる、という事を長年の経験から勉強してきた。つまり先入観を持たないでお話をうかがう事が肝心なのだが、これがなかなか難しい。生半可な知識がある場合がもっとも厄介で、そうした場合の聞き取りは、自分の持っている知識に都合が良いようにうかがった話をこじつけてしまう可能性がある。これまでに行った様々な調査の現場では、かつて学者や研究者が行った聞き取り調査が、現地に弊害を残していると感じる場面に出くわすことが何度かあった。聞き取り調査をさせて頂く場合、質問の仕方によっては真実がねじ曲げられる可能性がある。今回[もんぺ]という衣類の聞き取り調査をさせて頂いた折には、その弊害を痛いほど感じた。この[もんぺ]は岩手県では[ももひき]と言われている形態のものであり、その形を見ると私達はどうしても[ももひき]という言葉に連想してしまう。何故に[もんぺ]という言葉があり、それが本来どういう形のものであったかという疑問を持つ前に、[もんぺ]は戦時中に改良されたものであるとの一般常識が定着しており、私達はその常識からなかなか抜けられないでいる。しかし今回の聞き取り調査で、その一般常識は再考の必要があるかもしれないと感じた。「これは何ていうものですか？」とお聞きすると、打当地区の鈴木千鶴子さんは一瞬ためらわれ、「私達は[もんぺ]と言うが、[ももひき]と言った方がいいのかな、先生や学生さんはそう言った」とおっしゃった。「いえいえこの土地の事はこの土地の方が言っておられた言い方でいいんですよ」と申し上げたが、自分達が言い習わしてきた言葉を遠慮がちに言わなければならない雰囲気には問題を感じた。地元の方の言い方と聞く側の常識とがずれる場合は、それなりの理由があるはずであり、それこそが研究者の側で解明しなければならない課題である。聞き取り調査の現場で、話者のお話を否定するような聞き取り調査をしてはならないと思う。[もんぺ]については根子地区の佐藤富久栄さんにも同じように質問させて頂いたが、「戦時中に避難しやすいように改良された[もんぺ]ができる前から、私達はこのものを[もんぺ]と呼んでいた」とおっしゃられた。富久栄さんによれば、根子地区は「おちびと（落人）」の土地柄であり、永らく人々は隠れるように暮らしていた時代があったそうだ。現在根子地区に入るには、^{あかしな}笑内地区から昭和50年に開通したトンネルを通して簡単に行く事ができるが、トンネル開通以前の根子の人達は大人の足でも一時間の山越えをしなければ笑内地区に出られなかったそうだ。阿仁の他地域の話では「昔は其処に人が住んでいるという事が分からない時代があったようだ。川下に箸が流れて来て初めてその存在を知った」という、まるでおとぎ話のような話が伝わっている。戦後佐藤家では製薬の仕事が拡大し、富久栄さんの代には経済活動がより活発になっている。しかしながら父富松さん以前の根子地区は地形的に隠れ家に相応しい条件を備えており、一般の人々が外界と頻繁に接触できる土地柄ではないため、伝統はあまり崩れる事なく受け継がれてきたと推測できる。また「し

かり」を代々務められた家の11代目である富久栄さんは、厳格に掟を守る立場であり、また指導者として守らせる立場にあった。それゆえその証言には重みがある。また佐藤富久栄さん、松橋時幸さん、鈴木千鶴子さんのお三方は昔の日本語の発音にあったと言われる「は」行を「ふぁ」と発音できる方達で、特に「ひ」を「ふい」「へ」を「ふえ」と顕著に発音された。殆ど失われつつあるその発音をされる方達は、言葉と共に生活全般においても確かな伝承者であり得る。実際に「もんぺ」という言葉がどこからきたものか確認しようがないが、今回の調査で少なくとも戦時中に生まれた言葉ではなく、古くから存在している言葉だという事だけは確認出来た。先入観に左右された研究者の聞き取り調査が残した弊害は「炉」を表現する場合にも感じている。岩手県でも同様であるが、現在はどこもかしこも「いろり」一辺倒になってしまった。最近の新聞記事の中に、縄文時代後期の方形配石住居跡が発掘された事を報じるものがあったが、解説の中にわざわざ炉の読み方を（いろり）としてあるものがあった。「炉」の言い方は地域によって様々であり、地元の方に「昔はどう言っていましたか」としつこくお聞きすると、「昔はいろりなんて言わなかったんだ」と言う事になり、今でも色々な名称をお聞きする事ができる。ちなみに阿仁地区では「ゆるぎ」と言うそうだ。民俗調査の場合は昔から使われてきた言葉を大事にしていきたい。そうした言葉からは思いがけない発見をする事があるからである。

地元にあつてこそ輝きを放つ有形民俗文化財

また調査の過程で様々な問題が持ち上がったが、その多くが外部の人間の無責任な足跡による被害が原因であった。地元の人から「ものを貸したが、返ってこない」「返ってきて自分のものではない、余所のものが返ってきた」などといった嘆きを何度か聞かされた。こんなことがあっていいのかと腹立たしさを禁じ得なかったが、地元の人々の嘆きの中には学者並びに研究者に向けられているものもあった。こうした地元の方々の不信感や岩手県の調査でも経験しているが、研究者の端くれとして注意しなければいけないと思った次第である。過去のこうした経緯は「もの」に対する意識が低かった結果と思われるが、有形民俗文化財は地元にあつてこそ、生き生きと輝きを放つものであり、骨董的価値感とは相容れないものである。学術資料としてもう少し丁寧に扱ってほしいものだと思った。

学術的価値の高い資料群

こうした状況の中で調査を続けた結果、幸い現在地元に残されている資料群が、地元に着し濃密な情報を付帯している学術的価値の高い資料群であることを確認できた。生活用具に関しては未調査だが、「もの」はまだ残存している可能性があり、今後の取り組み次第では、生活文化を取り込み「マタギの郷」を立体的に復元することも不可能ではない。地元の方々にとっては、過去の生活用具は案外邪魔物だが、「もの」は歴史という時間をくぐり抜けると貴重な文化財になっていく。「阿仁マタギの郷」の生活用具は阿仁の暮らしを根本から支えた「もの」であり、他地域のもの置き換える事のできない文化財である。決して捨てたり焼却したりすることがないようにと願わずにはいられない。

報告の内容と伝達方法

今回の調査で作製した実測図は「またぎ(狩猟)」関係用具に絞られている。掲載順位は身支度から「またぎ(狩猟)」の現場へというおおまかなストーリーを念頭に置いた。生活環境については聞き取り調査で得た情報を出来る限り記録する。根子、比立内、打当の三地区は生活の基盤や「またぎ(狩猟)」関係用具の名称に若干相違が見られ、「もの」についても多少の相違がある。そこで阿仁地域における三地区の相違が混在しないように分けて報告する。「マタギ資料館」収蔵のもので旧所有者の所在地区が三地区に含まれるものは各地区に振り分け、旧所有者が分からないものは「マタギ資料館」収蔵として一項目を設ける。その場合付け札にある名称を記録すると共に三地区の呼称を併記する。1点の資料は基本的に実測図・写真・バックデータで紹介する。比立内地区の松橋時幸家のものは、松橋旅館の重要な展示品のため、今回の調査では実測図を作製できなかった。そこで写真とバックデータで報告する。

文章中の資料名は[]の中に漢字混じりの平仮名で表記し、動植物名は原則として片仮名表記するが、食品あるいは製品に変化したものについては漢字ないし平仮名表記を心掛けている。バックデータ

に出てくる個人のお名前については敬称を省略する。実測図の単位はミリメートルである。

「またぎ」という用語の表記について

今回の聞き取り調査で「またぎ」という言葉が二つの意味で使用されている事を確認した。一つ目は「またぎに行く」あるいは「春またぎ」のように「狩猟」を意味している。二つ目は「またぎが作った」あるいは「またぎが着た」と言うように「狩りをする人」を意味している。阿仁の人達が昭和の終わり頃、「狩りをする人」を意味する「またぎ」を「阿仁マタギ」と片仮名表記することにしたという経緯から、今回は「狩りをする人」をマタギと表記し、文中「狩猟」を意味している場合は「またぎ(狩猟)」と表記する事にした。

情報の提供者及び協力者

根子地区は、佐藤富久栄(昭和2年7月17日生)さん及び佐藤千代(昭和8年5月25日生)さんご夫妻から、比立内地区は、松橋時幸(昭和9年4月4日生)さんから、打当地区は鈴木米孝(昭和26年1月12日生)さん、並びに米孝さんの母鈴木千鶴子(昭和2年7月10日生)さんからお話をお聞きした。千鶴子さんからは夫である故鈴木松治(大正9年3月7日生)さんの事をお聞きすると共に、マタギを支えた女性側の気持ちなどを話して頂いた。また米孝さんからは子供の頃の記憶と共に、米孝さんの代になってからの「またぎ(狩猟)」についてお話をうかがった。なお本調査の調査委員である春日克男(昭和6年4月2日生)さんから[元折れ銃]に関するお話をお聞きしたので、比立内地区の所で報告する。また私の共同研究者である物質文化研究所一芦舎代表の名久井文明には、聞き取り調査に同行してもらい、随所で適切なアドバイスを受けた。彼は岩手県の北上高地で、狩猟を含めた山の暮らしを調査した経験があり、北上高地の狩人とも言える内間木安蔵さんと10年余の交流を経て「山と生きる」という書物を刊行している。狩猟に関しては私より知識があるので、心強い助っ人であった。

また実測図を作製するに当たっては東京在住の角館さえさんの他に、有形民俗資料の実測図作製は初めてという方々に協力を仰ぐ事になったが、本当に真剣に取り組んで頂き大きな結果を残して頂いた。家系の調査では北秋田市の中林三千夫さんにご協力頂いた。心底地元の文化を愛しておられる方達との出会いは、何にも勝る成果であり、気持ち良く仕事をする事ができた。

「お話を聞かせて下さった皆さん、実測図を描いて下さった皆さん、そして秋田県や北秋田市の行政の皆さん。行き届かない所が多々あったと思いますが、真摯にお付き合い頂きありがとうございました。」

阿仁マタギを支えた生活基盤

私の頭には「マタギとは狩猟を職業とする人」という固定観念があり、それは狩猟を専門とする人達というイメージであった。確かに狩りによって得た獲物は毛皮や薬となって現金収入につながり、その意味では職業集団的ではある。しかし専門とはいいにくい面もある。その生活サイクルは農閑期に杣や木挽きをする人達の生活サイクルとも似通っており、マタギの文化をとらえるためには、まず彼らがよりどころとする生活基盤をとらえておかないと理解が難しいと感じた。根子地区では製薬が盛んに行われていた。中村地区、打当地区でも行われていたようだが、比立内地区ではあまり盛んではなかったらしい。比立内地区で際だつ事はウサギ猟が盛んであった事だ。このように三地区でうかがったお話にはそれぞれに地区の個性があり、一概にマタギをひとつの定義で括るには無理があると感じている。比立内地区在住の松橋時幸さんは「またぎ(狩猟)は仕事の合間の休養をとる事から始まったようだ」と、松橋家の場合を話して下さった。松橋家は佐竹藩ゆかりの「山師」をしていた関係もあり、経済的な背景には他とは違うものがあるが、マタギを考える上で示唆に富むものである。かつては働いている人の休息として「またぎ(狩猟)」が行われていたようだと、頭領であった松橋家ではその時の獲物をお金を払って引き取っており、同時にマタギの「しかり」としての役割も果たしていた。こうした社会的背景は地域によって異なっているため、今回の調査ではありのままのマタギをとらえるために、一年の生活サイクルを念頭においた。

岩手県の北上高地を20年以上調査対象として来た経験から、自ずと北上高地と奥羽山地を比較しながら調査する形となった。マタギの郷と言われる阿仁地区は山を生活基盤とする営みにおいて北上高地と共通するものが多い。しかし主に気候の相違からくる稲作地帯と雑穀地帯の相違は顕著である。盛岡で氷点下7度近くに下がった折、大雪に埋もれた阿仁では外気が湿り気を含んでぽかっと暖かかった。阿仁地域、北上高地共に焼き畑も行われていたが、阿仁地域が山がちでありながら稲作地帯である事は、かつての北上高地と際だつ相違点である。北上高地は冬の低温と夏の「やませ(沿岸から這い上がってくる冷涼な霧)」に悩んできた地帯で、そこで収穫可能な雑穀は地域の支えである。その収穫には智慧を絞った。ヒエの種蒔きの際に行われた「じきふり=ぼった蒔き(人糞に種を混ぜて蒔く作業)」はその代表だが、阿仁地域では行われていない。それは自ずとその努力の必要がない土壌の豊かさを物語っている。しかし阿仁地域でも農耕に必要な肥料はウシやウマを飼ってそこから得られる堆肥を使っており、北上高地と共通している。しかしウシやウマの餌となる草を確保する方法においては、案外に大きな相違があった。北上高地では「ひくさ刈り」あるいは「ひくさ背負い」といった言葉がある。「ひくさ」とは乾燥させた草の事で、夏放牧していたウシやウマを冬は家で飼うため、餌や敷き草として「ひくさ」が必要になる。9月頃に刈り取った草はその場で「草しま」にして乾燥させ、「秋じまい」の頃「ひくさ背負い」あるいは「草背負い」と称して山から下ろしてくる。阿仁地域でも「盆草刈り」に伴う「草背負い」があるが、それは刈り取った生草の状態で行われる。干す事もあったそうだが、基本的にウシやウマには生の草を与える。北上高地では冬のウシやウマの餌として草を干して保存する事が必要不可欠な営みだが、阿仁地域では冬のウシやウマの餌や敷き藁には秋に収穫された稲藁が豊富に存在しており、草を乾燥させて保存する必要はなかった。これは同じ営みの中にありながら思考の盲点を突かれる大きな相違であった。

思考の盲点を突かれると言う意味では藁素材の製品についても言える。藁製品を作る際、阿仁地区では先ず「にわ(作業場)」や外に置いてある[藁打ち石]の上で乾いたままの藁束を[藁打ちきね(槌)]で叩き、何回か束をほどいては細かく砕けた藁を取り除いて再びまるって叩く。そうして繊維を柔らかくした藁を素材として藁製品を作る。北部北上高地でも作り方はほぼ共通しているが、藁製品を作る際に藁束に湿り気を与えてから藁打ちをしていた点に相違がある。彼らは「藁製の履き物はあったかみが

あっていいもんだ」と言い、地元では手に入らない藁を海岸地帯の野田村で手に入れるため、苦しい「藁背負い」という営みを続けた。そうして手に入れた藁材で履き物を作っていた。両地区における大きな相違は藁束に湿り気を与えるか否かであるが、稲作地帯である阿仁の藁束は収穫したばかりで新鮮なため湿り気を与える必要がない。しかし北部北上高地の雑穀地帯では、やっと手に入れた一年分の履き物を作るための藁束は、保管している間にどんどん乾燥していくため、適度な湿り気を与える必要があった訳である。藁製品を作るという同じ営みでありながら、気候による相違は「物作り」に結構大きな影響を与えるものであり、そこに智慧が生み出される源もあると感じている。

また北上高地ではマダ(シナの木)皮をはじめとする樹皮製品が大変豊かである。阿仁においても[けら(蓑)]や荷縄はマダ製だが、北上高地で樹皮素材で製作されている「もの」と類似した「もの」が、[みご縄]や普通の藁を素材として作られている。「みご」とはイネの穂先の太い藁を取り除いた部分の事で、その部分を[藁打ちきね(槌)]で叩き軟らかくして縋った縄が[みご縄]である。佐藤富久栄さんによれば、[みご縄]で作られている袋物と似たものが、昔は[こだし]と言ってブドウ蔓の皮で作られていたのを記憶しているとの事であった。藁が豊富な地帯は藁で間に合うものは藁を素材とする。一方で藁が存在しなかった地域では樹皮やその他の素材を吟味して「もの」を作る。それは当然の成り行きである。

生活必需品を観察していると、それらが地域の自然環境と密接に関係し、丈夫でなおかつ簡単に手に入りやすい素材に対して、常に敏感に反応しながら作り続けられた様子がうかがえる。また、とにかく「もの」を作ってその場をしのいだと思われる生活用具もあるが、そういう「もの」との出会いは、人間が生きていくために「もの」が欠かせない存在だと言う事を一層深く認識させられる。それゆえに生活必需品は、地域の歴史の一側面やそこに生きた人々の心を語る代弁者ともなりうる存在なのである。

いずれ阿仁マタギの郷は稲作地帯として恵まれた環境にある事を実感したが、それでも食糧調達は必須課題であり、一年のサイクルが農業を基盤としている事に変わりはない。また煮炊きや暖をとるための薪取り、茅葺き屋根の葺き替え、かつて行われたアサヤカラムシを素材とした衣類の製作など、日常生活を支える道具や用具の製作を始めとする諸々の営みが、家族全員であるいは地域が一体となって行われていたのである。それらの営みがなければ普通の人々はもとよりマタギの生活も成り立たなかった。「またぎ(狩猟)」は主に冬期間の営みである。狩猟期間は動物の生態と密接に関わっており、冬以外の季節の猟では獲物が腐りやすく、品質の良い毛皮もとれなかった。つまり「またぎ(狩猟)」以外の営みが一年の3分の2を占めている。このことはマタギの本質をとらえる上で重要なポイントだと考えている。